

松本市文化財調査報告 No.114

TOUKONBARA

松本市トウコン原遺跡II

——緊急発掘調査報告書——

1994. 3

松本市教育委員会

序

松本市北部の岡田地区には過去の発掘調査から多くの遺跡が分布していると知られておりました。今回当地に治水緑地と陸上競技練習場建設事業が計画され、トウコン原遺跡を含む地域もその対象となったことから、文化財保護を図る必要が生じました。松本市が松本建設事務所より委託を受け、市教育委員会が事業に先立つ発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行なうことになりました。

発掘調査は市教委によって組織された調査団により、平成3年12月と翌4年8月の2回に分けて、行なわれました。作業は冬の厳寒と夏の猛暑に悩まされましたが、参加者の皆様の御尽力により無事終了することができました。

しかしながら、開発事業に先立って行なわれる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であり、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた地元関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成6年3月

松本市教育会 教育長 守 屋 立 秋

例 言

- 1 本書は平成3年12月7日～同月20日、平成4年8月17日～同月27日にかけて実施された松本市岡田松岡に所在する、トウコン原遺跡の第2次緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本建設事務所の委託を受け、松本市教育委員会が行なったものである。但し平成4年度の調査は(財)松本市教育文化振興財団が担当した。
- 3 本書の執筆はIを事務局、IIを森義直、IIIを三村竜一が担当した。
- 4 本書作成に当たっての諸作業は上條尚美、村山牧枝、堤加代子、倉科祥恵、小松正子が行なった。
- 5 本調査に関する書類、図面及び出土遺物は松本市教育委員会が保管している。

I 調査の経過

1. 調査に至る経緯

長野市にある県民文化会館、伊那市の伊那文化会館に引き続き、中信地域の文化拠点として松本文化会館が松本市水汲に建設されることとなった。このため以前よりこの地にあり、多くの人々から親しまれてきた陸上競技場を移転し、新たに造る必要が生じた。そこで松本市岡田松岡が建設場所となった。この施設は現地西側を流れる大門沢川の水量調整用として建設する遊水池を利用した競技場であり、長野県と松本市が共同で実施する治水緑地事業の一環として行なわれるものである。この地の東側はトウコン原遺跡として周知されている埋蔵文化財包蔵地で、当地にも広がっている可能性があるため、市教育委員会では建設事業主体者である松本建設事務所及び松本市と保護協議をして、平成2年度に試掘調査を実施した。この結果、同用地の東側部分を中心に遺物の出土が認められたため、発掘調査を前提として保護協議をし、建設事業計画に合わせて、平成3年及び4年の2ヶ年で発掘調査を実施し、平成5年度に調査報告書を作成することとした。

2. 調査体制

【平成3年度】発掘調査

調査団長 松村好雄（松本市教育長） **調査担当者** 三村竜一、今村克、和田正雄（社会教育課）

協力者 赤羽紀子、飯田三男、大沢ちか子、大堀一男、興喜義、小林徳子、瀬川長廣、瀧澤隆男、武田睦恵、鶴川登、寺嶋あや、寺島貞友、中島新嗣、中條光子、平林薫、深井美登利、深井やすの、藤井源吾、藤井マツエ、藤井道明、三沢元太郎、宮下和子、矢崎寛子、矢沢うめ子、吉江園子、吉澤克彦、吉澤群治

事務局 荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚、関沢聡、木下守、竹内靖長（主事）、久保田剛（事務員）、荒井由美、山岸弥生

【平成4年度】発掘調査

調査団長 松村好雄（～H4.6）、守屋立秋（松本市教育長） **調査担当者** 竹原学、今村克（考古博物館）

協力者 荒木龍、飯沼忠、池田穂積、石川末四郎、上野章子、内澤紀代子、内田和子、王属豫、大沢ちか子、大角けさ子、岡村行夫、小池愛子、寺島貞友、中嶋秋子、中村朝香、中村敦子、中村恵子、林昭雄、平出貴史、藤井源吾、藤井マツエ、三井千明、MIN AUNG THWE、村松恵美子、山岸弥生、山田英之、山本耕、横山小夜子、横山保子、與曾井尋由、林嵐、和田和哉

教育委員会 島村昌代（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、窪田雅之（主任）

（財）松本市教育文化振興財団事務局：深澤豊、（事務局長）、牟禮弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

考古博物館：神澤昌二郎（館長）、直井雅尚、関沢聡（主任）、久保田剛（主事）、藤原美智子

【平成5年度】報告書作成

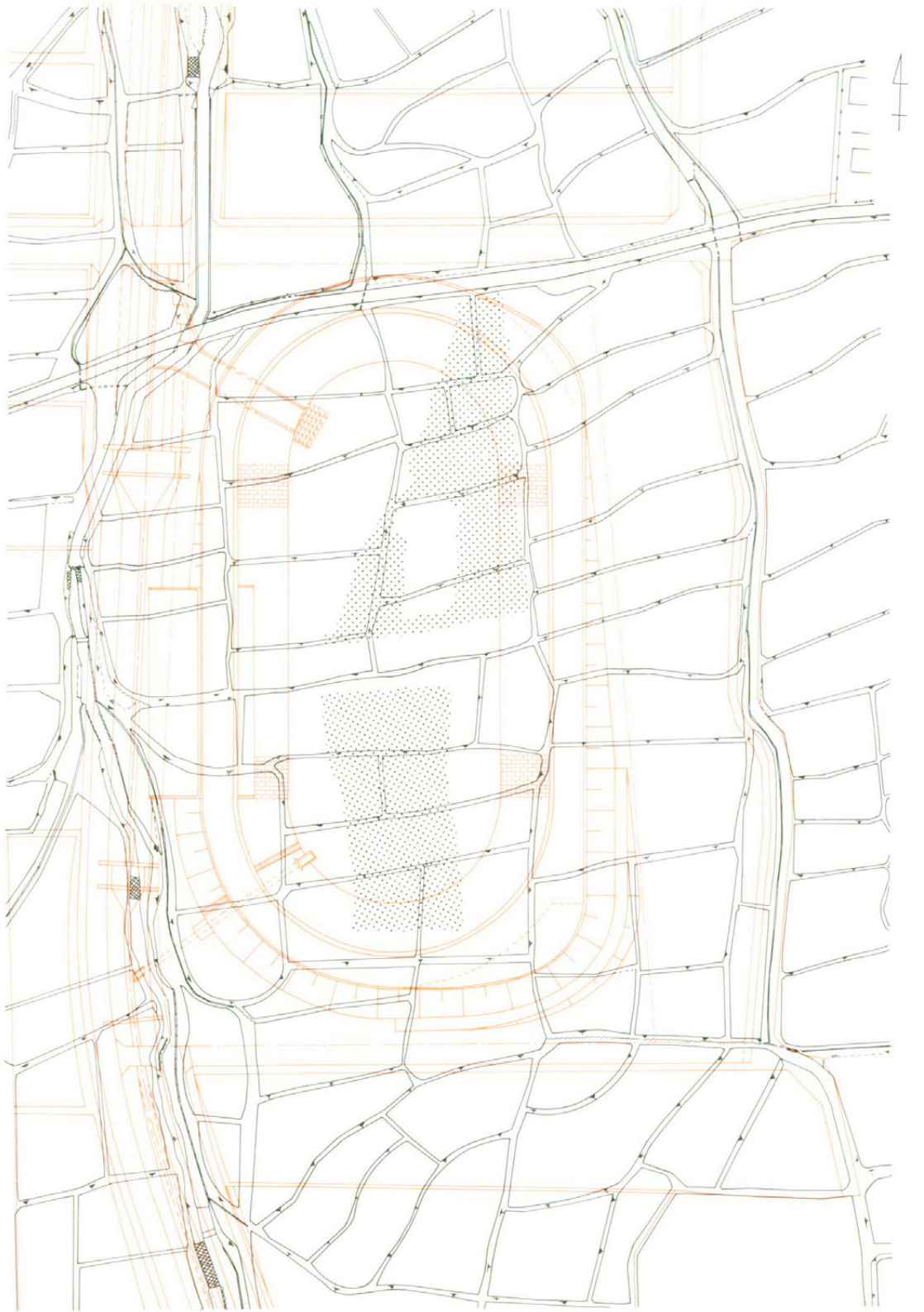
担当者 総括：三村竜一 **調査員** 森義直、竹原久子、松尾明恵、三村肇、宮嶋洋一

協力者 上條尚美、倉科祥恵、小松正子、堤加代子、村山牧枝

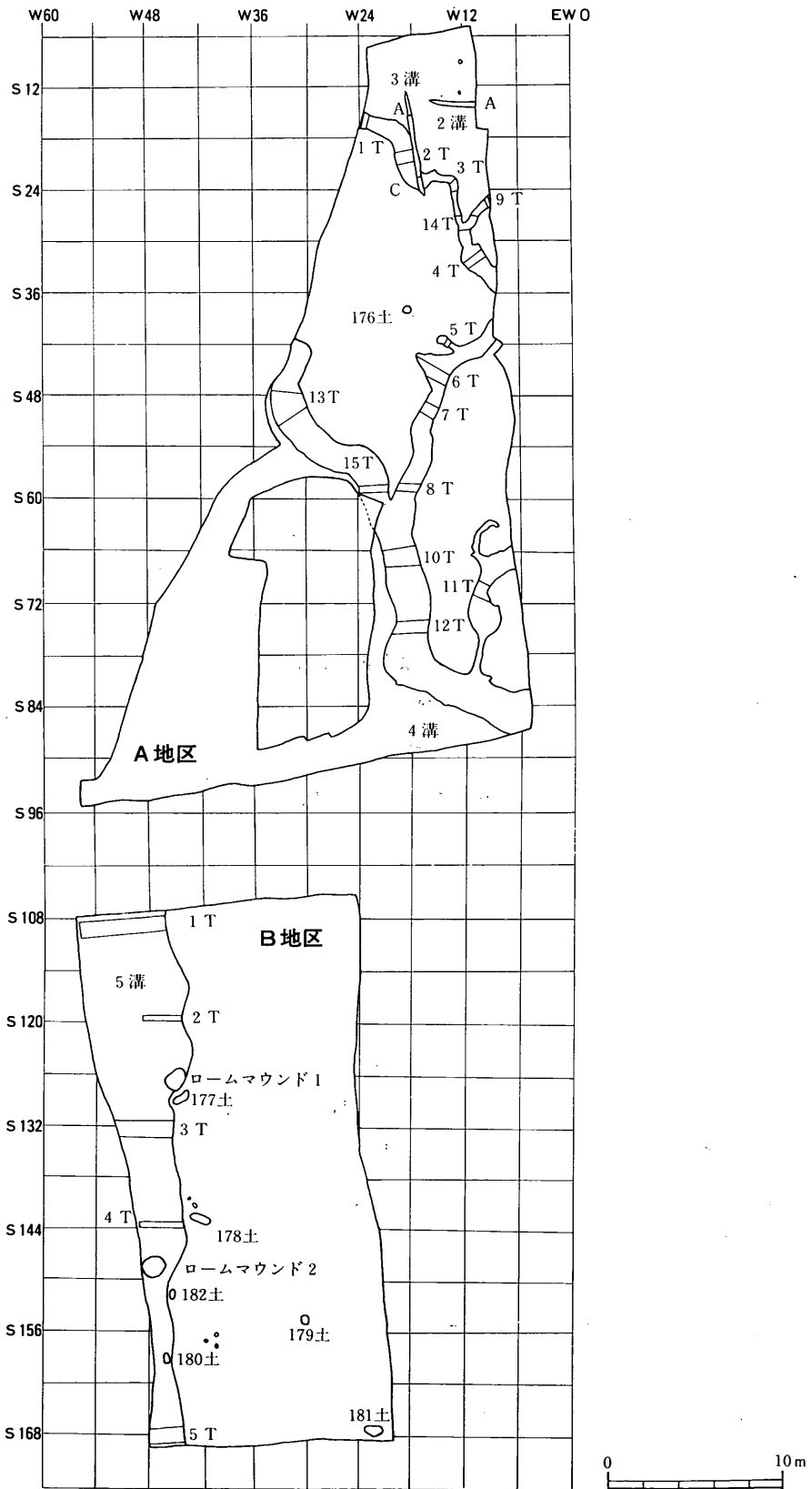
教育委員会 島村昌代（社会教育課長）、木下雅文（課長補佐）、窪田雅之（主任）

財団事務局：大池光（事務局長）、牟禮弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

考古博物館：熊谷康治（館長）、松澤憲一（主任）、木下守、久保田剛（主事）、遠藤守（事務員）、藤原美智子



第1図 調査範囲



第2図 全体図

II 遺跡の環境

調査地の地形と地質概要

a) 地形地質

トウコン原遺跡は、女鳥羽川により形成された扇状地の西端近く、標高 640 m～645 m 付近にある。女鳥羽川は東部山地の武石峠（1,810 m）付近をはじめ、西流する幾本かの沢が集まってできた川である。更新世の末頃は、城山付近へ流れていたとみられ、古女鳥羽川の堆積物が厚く堆積している。その後、城山一帯の西側の山地が、東側に傾動しながら隆起し始め、東側が低くなり流路は次々に東へ曲がり、稲倉付近では 120°首を振って南流するに至ったと推定される。

地形が西から東へ傾動した結果、右岸には 3 面の段丘が見られるが、東側には最下位の段丘面しか見られない。本遺跡は右岸（西山側）第 2 段丘面の西端にある。

この女鳥羽川扇状地は、他の扇状地とは異なり、扇状地の両端付近が凹地で、中程の岡田町付近が高くなっている。この原因については、宮の上遺跡・原畑遺跡の報告書⁽¹⁾に詳述してあるが、概略を述べると、流路は稲倉付近で大きく曲がっているため、洪水時に水の勢いで隆起しつつある西の山際方向に流れることもあり、8～9 C 頃は、西山側の岡田町遺跡付近の第 2 段丘面を削って流れ、岡田町付近が高くなっているのは、川自身のつくった自然堤防と考えられる。その後、平安時代中頃の大洪水では、岡田町一帯に土石を厚く堆積させ、その結果、洪水堆積物に阻まれ、再び東端の凹地を流れるようになり、現在に至ったと推定される。

b) トウコン原遺跡について

本遺跡は、上述した岡田町西部の凹地の延長線上にあり、奈良～平安時代前期には、女鳥羽川は岡田町の西部を流れていたと推定されるので、本遺跡付近はその支流と、西側山地の塩倉付近から流出する小川が流れ、用水として使用していたと考えられる。今回発掘された溝址は、そのいずれかである。

トウコン原遺跡は、第 2 段丘面の西端にあるため平安時代中期以後洪水の直撃を受けた形跡はなく、したがって、ふるいわけの悪い巨礫混じりの黒色土層は存在しない。おそらく平安時代中期の洪水時には、穏やかな側方からの冠水により埋まったものと推定され、細粒の黒色土・粘土・砂層などの堆積物がそれを物語っている。代表例として溝 5-1 T に示す如く、粘土質の厚い堆積物で大部分が埋まり、溝の幅と深さを減じてやがて消滅したことを示している。本遺跡を覆っている堆積物の主体は、女鳥羽川による上流からの堆積物であるが、西側山地の塩倉付近から沢によって運ばれた堆積物も混在している。

本遺跡の土層が淡緑色を呈している部分が多いのは、通気性が極めて悪く、そのため鉄分が酸化第二鉄とならなかったためであり、灰色を呈している部分は、鉄やマンガンなどが水で溶脱し下部へ移動したためである。なおこの付近は洪水がなくても 1 ㎥/年近くの自然堆積が進行している地域である。

註 1：松本市教育委員会 1994 『松本市宮の上遺跡Ⅱ・原畑遺跡』

III 調査結果

1. 調査の概要

a) 調査の方法

・本遺跡は、現況では水田として利用される範囲が広く、遺跡の範囲は明らかにされていなかった。このため調査地の選定は、本調査に先立ち、平成3年2月12日～13日にかけて実施した試掘調査（遺物・遺構の分布確認調査）の結果をもとに行なった。試掘調査は、治水緑地と陸上競技練習場建設事業にかかる範囲内に約2×2mの試掘坑を任意に設定して、それぞれの遺構・遺物の有無の確認をして、本調査地を設定した。

・調査は平成3年度（12月7日～12月20日）と平成4年度（8月17日～27日）の2年度に分けて行ない、平成3年度は北側半をA地区、平成4年度は南側半をB地区として実施した。

・実質調査面積はA地区3,776㎡、B地区1,768㎡、合計5,544㎡である。

・遺構検出面までの表土剥ぎは、建設用機械（バックホウ）を用い、約20～80cm掘り下げた。

・遺構の検出作業は人力で行なった。

・遺構の命名については、平成2年6月～7月に実施した本遺跡の第1次調査の続きNoをつけた。尚、第1次調査報告書は平成3年に刊行している⁽¹⁾。

・遺構の掘り下げは人力で行い、土坑・ピット・ロームマウンドはまず半分を掘り、土層観察を行った後全掘した。溝については小規模なものは土層観察用の土手を残して掘り下げ、土層観察後に全掘した。大規模なものは幅1～5m程のトレンチを任意で設定して掘り下げ、土層観察を行った。しかし、掘り込みが深い上に湧水が多く、底面迄の掘り下げが不可能なものもあった。

・平面測量は、A地区に任意に設定した基準点から南北方向に基準線を振り出し、そこから3m間隔に直交する線を振り、調査区内を3×3mのメッシュで覆った。調査地の求める点は基準点からの方向と距離の組合せ（座標）で表記出来るようにした。

・標高測量はA・B両地区内に任意に木杭を埋設し、基準とした。

b) 調査結果

・確認された遺構は土坑7個、ピット9個、溝址4本である。住居址は検出されなかった。土坑・ピットの時期は不明であるが近世以降のものと考えられるものが多い。溝址は人為的に掘られた比較的小規模なものと、大規模な自然流路がある。時期は分からない。

・遺物には土器と石器がある。土器は縄文土器・土師器・須恵器があるが量的には非常に少なく、遺構の時期を推定させるものはなかった。石器は縄文時代のもので溝址から出土しているが、遺構に伴うものではなく他からの混入品と考えられる。

・本遺跡の範囲・性格等の解明は出来なかった。しかし、縄文時代の遺物が得られたことから、調査地の周辺には奈良・平安時代の集落ばかりでなく、縄文時代の集落も存在していた可能性が高いと思われる。

参考文献1 松本市教育委員会 1991 『松本市トウコン原遺跡』

2. 遺構

(1) 土坑（第3図）

今回の調査では、長軸の直径が50cm以上の穴を土坑として扱った。2年度に亘る調査で確認された土坑は第176～182号土坑（以下○土と略）の7個である。

176土はA地区（平成3年度調査分）で検出した唯一の土坑である。建設用重機による表土削除の際に、耕作土直下に確認できた。楕円形の掘り方の中に木桶を埋設したもので、木桶の平面形はやや歪み、楕円を呈している。調査はまず南側半分を掘り方を含めて掘り下げ、土層観察を行った後に全掘した。木桶の中には、Ⅳ層：黒色粘質土、Ⅲ層：黄灰褐色粘質土、Ⅱ層：灰色粘質土、Ⅰ層：灰褐色粘質土の順で堆積していた。掘り方は地山の黄褐色土で埋めている。遺物はⅡ層中に直径20cm大の河原石が1個みられたが、その他に土器などの時期を推定させるものはない。本土坑の用途については、耕作土直下の比較的浅い深さに木桶を埋設していることから、農業用の肥溜めに利用されていたものと考えたい。

177土はB地区中央北寄りに位置する。平面はやや不整な長方形を呈し、東西225cm×南北85cm、検出面からの掘り込みは17cmを測る。断面形は皿型を呈する。覆土は炭化物が多量に混入する暗褐色粘土の単層であった。遺物は全く認められず、所属時期は推定できない。

178土はB地区中央西寄りに位置する。平面は楕円形を呈し、東西230cm×南北89cmを測る。底面は起伏をもち、中央部で深く掘り込まれる。検出面からの掘り込みは39cmを測る。覆土には暗灰色粘土が堆積していた。177土と同様に遺物はなく、時期は推定できないが、平面形・堆積状況等からみて近世以降のものと考えられる。その他の179～182土についても、178土と平面形・堆積状況等が類似しており、同時期のものと考えたい。

(2) ピット

単独の遺構で長軸の直径が50cm未満の穴をピットとして扱ったが、本報告では個々の遺構図は提示できなかった。確認されたピットは9個（P176～184）と数は少ない。分布をみるとA地区北端と、B地区の第5号溝址の東側にある。ほとんどが直径が30cmほどの穴で、平面形は円形を呈する。柱痕が認められるものはなく、覆土はすべて暗褐色土の単層であった。これらのピットに伴う遺物は全く認められなかったが、所属時期は平面形・堆積状況等からみて、土坑と同じく近世以降と考えたい。

(3) 溝址（第4～5図）

今回の調査では、第2～5号溝址（以下○溝と略）4本が確認された。このうち2・3溝は比較的小規模で、全掘した。4・5溝は比較的大規模で、幅1～5m程のトレンチを任意に設定し、調査を実施した。

2・3溝はA地区北端にある。2溝は幅57cm、深さ15cmを測る。東側は区域外に続くため、長さは明らかでないが、調査した長さは547cmを測る。断面はU字形を呈し、起伏のない底面は西から東へ僅かに傾斜をもつ。覆土は灰褐～黒褐色土を呈し、水を伴っていた様子は窺えない。遺物は全く認められなかった。3溝は幅54cm、長さ1,195cm、深さ18cmを測る。断面形は場所により、台形・皿形・三角形と異なっている。起伏のない底面は、地形に沿って北から南へ傾斜をもつ。覆土には灰褐色土が堆積し、2溝と同様に水を伴っていた様子は窺えない。遺物は縄文土器の小破片1点があるが混入品の可能性が高い。2・3溝の時期は推定できない。

4・5溝は概ね北から南・北西から南東に流れる自然流路と考えられるものである。4溝はいくつかの支流が合流し、次第に幅が増している。5溝についても、おそらく調査区域外の南で4溝と合流するものと考えられる。最大幅は4溝は585cm、5溝はわからない。4溝の断面形は場所により、台形・皿形・三角形等に変化しており、幅の狭い上流では三角形、幅の広い下流では流心部分に段をもつ台形を呈する。最上流に位置する1トレンチ（以下○Tと略）と最下流の12Tの距離は57m程あり、底面の高低差は約240cmである。覆土には灰色砂が多くみられ、自然埋没の様相を示していた。5溝は非常に深い上に湧水があり、底面までの調査はできなかった。遺物は4溝から若干の縄文土器片（第6図）と木がある。土器片は上流から流されてきたものらしく、摩滅が激しく時期はわからない。木には加工痕等は認められなかった。

(4)ロームマウンド（第5図）

B地区で第1・2号ロームマウンドを検出した。いずれも5溝と重複関係にあり、5溝の覆土中に底面をもつ。第1号ロームマウンドは不整形を呈し、長軸228cm、短軸180cm、深さ45cmを測る。覆土は地山の淡緑色粘土が暗灰色粘土の上層にもち上がっていた。第2号ロームマウンドは西端が調査区域外に続く。不整形を呈し、長軸261cm以上、短軸276cm、深さ44cmを測る。覆土は地山の淡緑色粘土が黒灰色粘土の上層にもち上がっていた。壁の掘り込みは緩やかで、壁と底面の区別はつきにくい。底面は起伏があり、南側には長径100cm程の楕円形の落ち込みがある。いずれも遺物の出土はなく、所属時期はわからない。

3.遺物

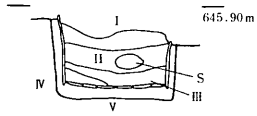
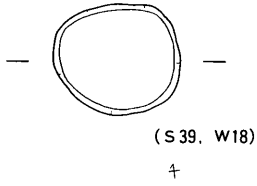
(1)土器（第6図）

土器は縄文土器・土師器・須恵器がある。縄文土器はすべて小破片で14点を数えるに過ぎない。3溝から1点、その他は4溝からの出土である。いずれも摩滅が激しく、1点を拓影・断面図を示すことができた。中期後半から後期に属するものと思われ、他から流入したものと考えたい。4溝4Tから出土した。土師器は検出面から1点が得られたが、小破片の為に器種はわからない。須恵器は181土出土の3点がある。器種は杯1点と壺・甕類2点であるが、小さな破片の為に時期は不明である。

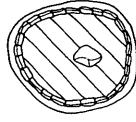
(2)石器（第6図）

縄文時代の石器が5点出土した。内訳はスクレイパー1点・石核1点、使用痕のある剥片3点である。1のスクレイパーはチャートの横長剥片を素材としており、縁辺部に連続する剥離を加え刃部としている。刃部の形態は直刃、調整は両面加工である。2の石核は黒曜石製で、剥離は原石の自然面を打面にしている。縁辺部には使用痕がみられる。使用痕のある剥片は3が砂岩、4・5の2点が黒曜石を石材にしている。

第176号土坑

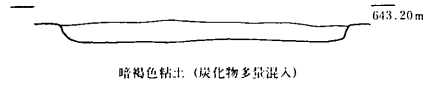
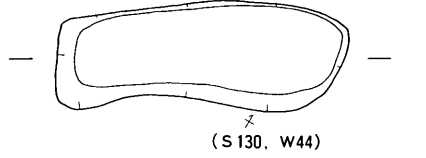


遺物出土状況

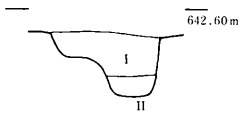
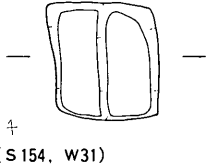


- I : 灰褐色粘質土
- II : 灰色粘質土
- III : 黄灰褐色粘質土
- IV : 黑色粘質土
- V : 黄褐色土

第177号土坑



第179号土坑



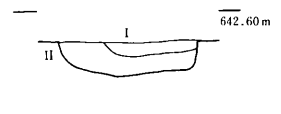
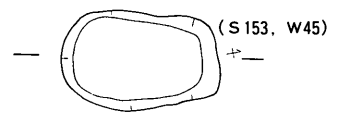
- I : 淡緑灰色粘土 (黒褐色粘土塊多量混入)
- II : 淡緑灰色粘土 (黒褐色粘土塊少量混入)

第180号土坑



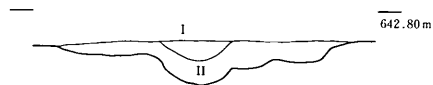
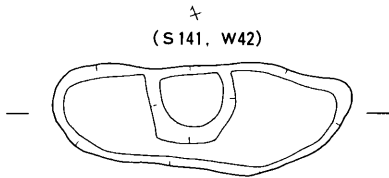
灰黑色粘土

第182号土坑



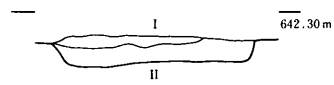
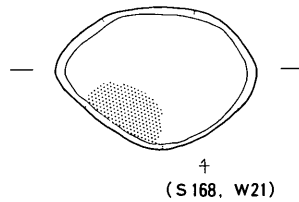
- I : 淡緑灰色粘土
- II : 黒灰色粘土

第178号土坑



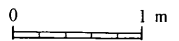
- I : 暗灰色粘土
- II : 暗灰色粘土 (Iより暗)

第181号土坑

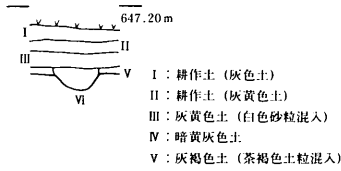


- I : 暗褐色粘土 (炭化物多量混入)
- II : 暗褐色粘土

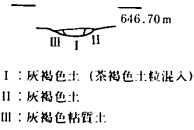
第3図 土坑



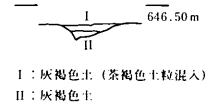
2溝-A



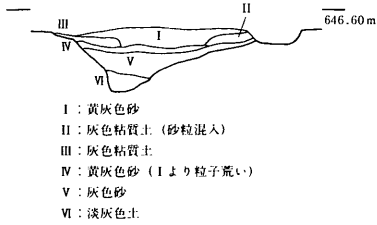
3溝-A



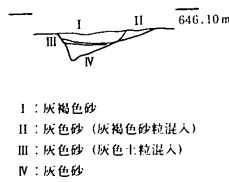
3溝-C



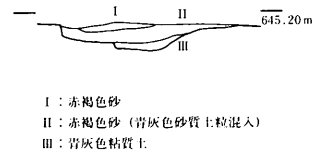
4溝-2T



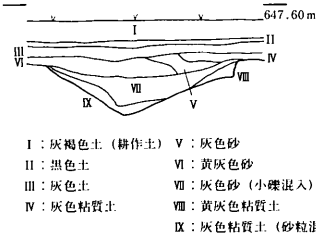
4溝-3T



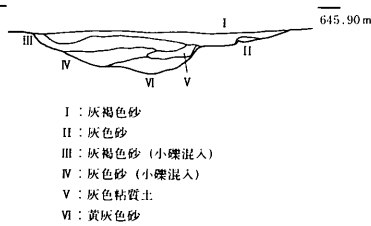
4溝-7T



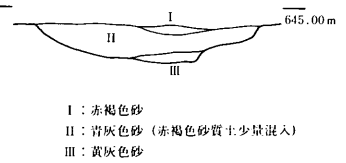
4溝-1T



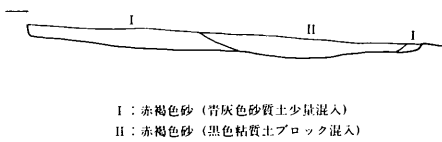
4溝-4T



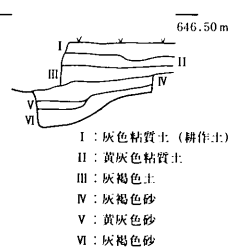
4溝-8T



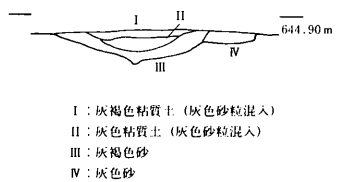
4溝-6T



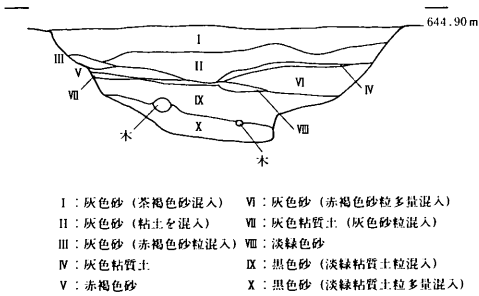
4溝-9T



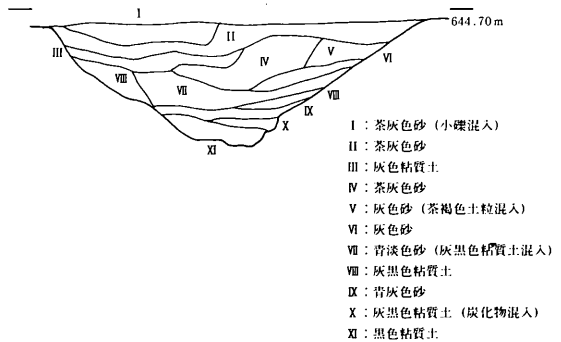
4溝-11T



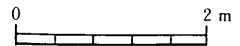
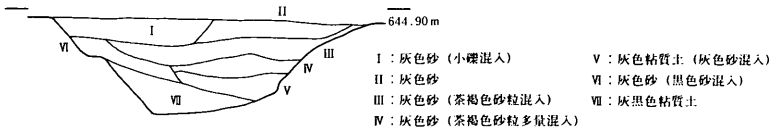
4溝-10T



4溝-12T

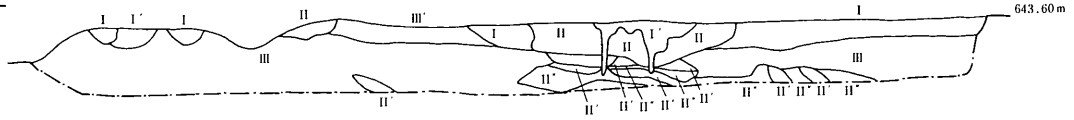


4溝-15T

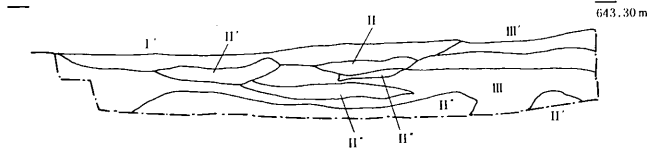


第4図 溝址(1)

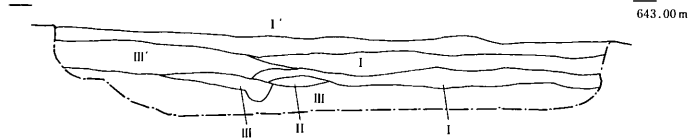
溝5-1 T



溝5-2 T

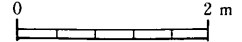
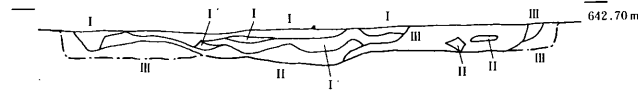


溝5-3 T

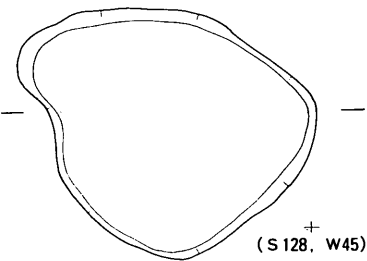


- I : 青灰色粘土
- II : 暗褐色砂 (粘土少量混入)
- III : 淡緑灰色粘土
- I' : 青灰色粘土 (砂粒多量混入)
- II' : 暗褐色砂 (淡緑灰色粘土混入)
- III' : 淡緑灰色粘土 (青灰色粘土混入)
- II'' : 暗褐色砂 (淡緑灰色粘土多量混入)

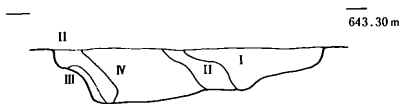
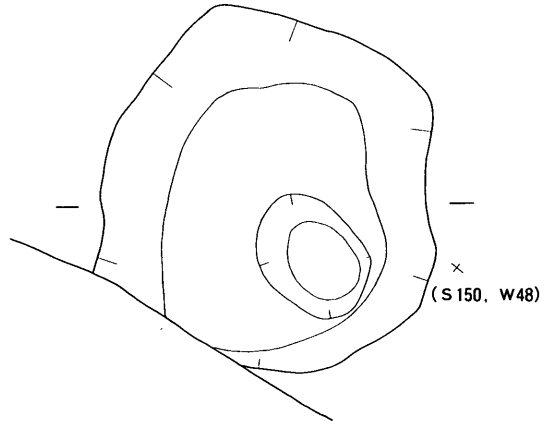
溝5-5 T



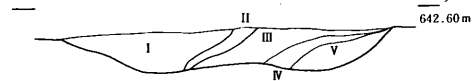
第1号ロームマウンド



第2号ロームマウンド



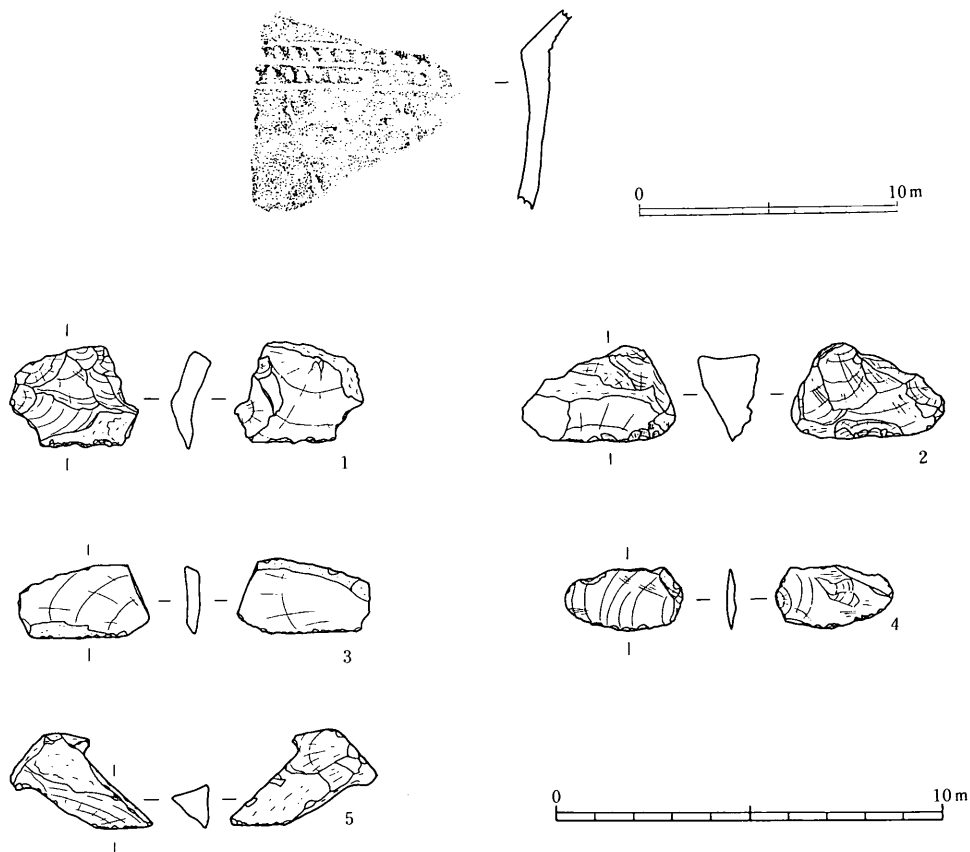
- I : 暗灰色粘土
- II : 暗灰色粘土 (砂多量混入)
- III : 暗灰色粘土 (黒色粘土ブロック少量混入・地山のもち上り)
- IV : 黒灰色粘土



- I : 黒灰色粘土
- II : 黒灰色粘土 (緑灰色粘土多量混入)
- III : 淡緑灰色粘土 (黒灰色粘土混入)
- IV : 淡緑灰色粘土 (地山のもち上り)
- V : 黒灰色粘土



第5図 溝址(2)・ロームマウンド



第6図 土器・石器

4.まとめ

トウコン原遺跡はこれまでに得られた遺物等から奈良～平安時代の集落遺跡であり、その範囲は松本少年刑務所の北側一帯と考えられていた。ところが平成2年度に実施した第1次調査（土地区画整理事業に伴う調査）に続いて今回の第2次調査でも、確認された遺構は前項に述べたように土坑・ピット等が中心で、竪穴住居址は検出されなかった。しかし、2次に亘る調査では奈良～平安時代の遺構・遺物の確認に加え、縄文時代の遺物を確認することができ、周辺には奈良～平安時代の集落の他にも縄文時代の集落が存在する可能性が高いとわかった。

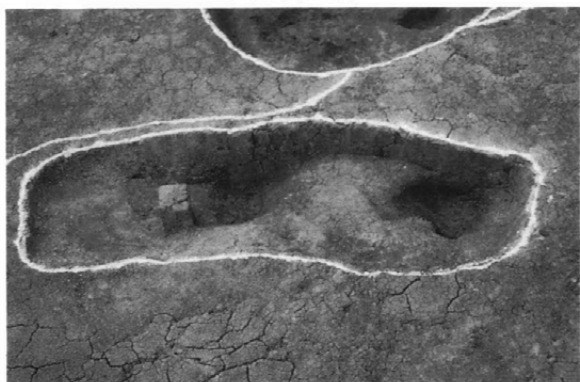
本遺跡のある岡田・本郷地区は近年宅地開発やほ場整備事業が進められ、それらに伴い岡田西裏・宮の前・岡田町・原畑等の多数の調査が実施されている。調査によって得られた資料の蓄積により今迄空白であった地区の歴史は解き明かされつつある。本遺跡の実体を知ることは地区全体の歴史を解明していく上でも重要であり、今後の調査に期待している。



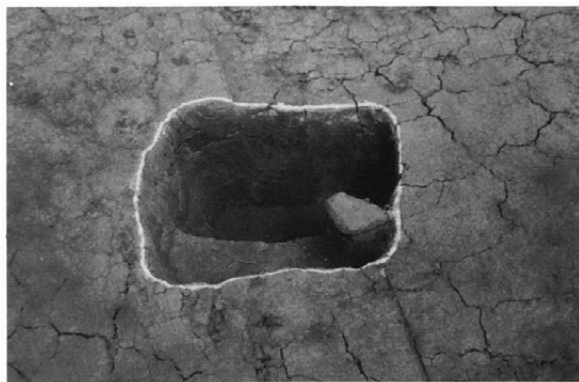
調査開始前



A地区検出作業



第177号土坑



第179号土坑



第180号土坑



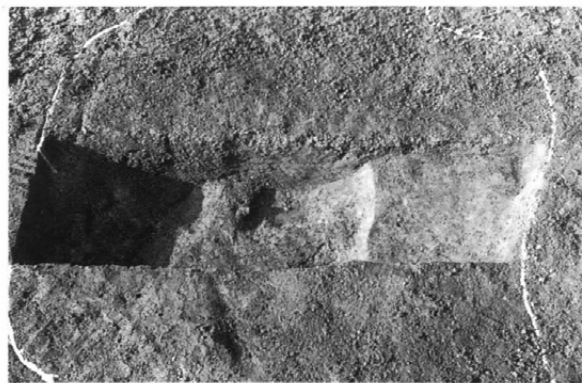
第181号土坑



4溝 1T



4溝 3T



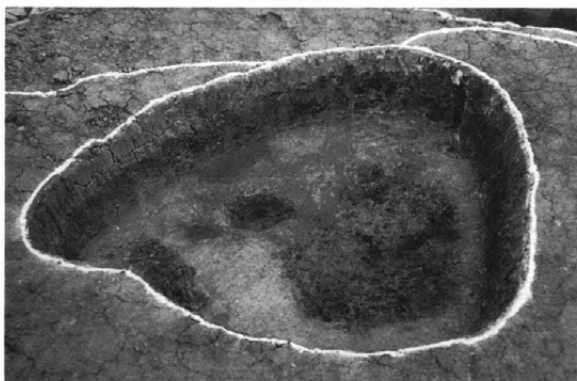
4 溝 9 T



4 溝 13 T



5 溝 1 T



第1号ロームマウンド



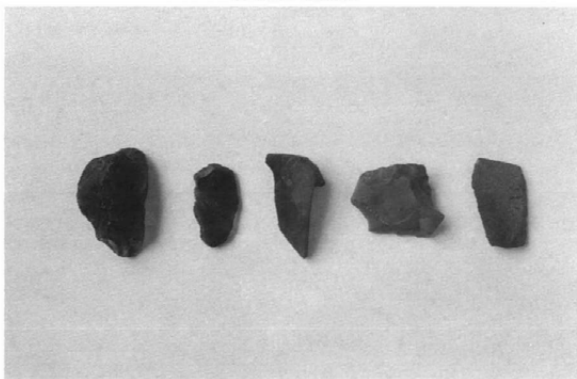
第2号ロームマウンド



B地区全景



現場での記念撮影

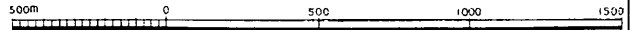


出土遺物(石器)



- 今回の調査地点
- 第1次調査地点

1 : 25,000



松本市文化財調査報告No.114

松本市トウコン原遺跡Ⅱ

平成5年3月20日 印刷

平成5年3月30日 発行

編集 松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸の内3-7

TEL 0263(34)3000

発行 松本市教育委員会

印刷 川越印刷株式会社